2012年12月20日

JACET-Chubu Newsletter

大学英語教育学会中部支部　No. 29

JACET 第 51 回国際大会開催報告

大会実行委員長　大森裕實
（愛知県立大学）

大学英語教育学会（JACET）の年次全国大会に相当する第 51 回国際大会が、戦後三番目の猛烈な暑さの中、2012 年 8 月 31 日から 9 月 2 日の三日間、名古屋の東部丘陵地帯に位置する愛知県立大学（長久手キャンパス）を会場として開催された。九州（福岡）での第 50 回記念大会（2011）で盛り上がった次年度だけに、果たしてどのくらいの参加者が見込めるだろうかと心配したが、豈図らんや、開幕してみると、一日 700 名に達さんばかりの来場者を数え、本部が用意した Convention Book が一掃されるほどの勢いに、スタッフ一同嬉しい悲鳴を上げることになった。

目　次

JACET第51回国際大会開催報告
大森裕實　1頁
英語教育フォーラム報告
大石晴美　2頁
講演会報告
・竹下裕子氏「国際言語管理の視点から見る言語と文化」　吉川　寛　3頁
・James F. D'Angelo "Four Paradigms to Inform Japanese ELT" 下内　充　4頁
海外学会報告
Sociolinguistics Symposium 19（SS19）報告
村田泰美　5頁
会員著書紹介
『World Englishes－世界の英語への招待』
吉川　寛　6頁
『インド英語のリスニング』
小宮富子　6頁
研究会紹介
「ライティング研究会」
佐藤雄大　7頁
Cyber Space
The Speech Accent Archive
Leah Gilner　7頁
掲示板　8頁
事務局より　8頁

本大会を成功に導いた第一の要因は、硬質なテーマ「大学英語教育への言語理論の応用ーコンテントとコンテクストを重視して」を設定したことにあろう。英語教育の学会発表がどうしても how to teach に傾斜する中にあって、what to teach の側面も大いに求められていることを実証した。第二の要因は、招聘した講師陣の多彩な顔ぶれであろう。海外から招聘した E. Dabrowska（認知構文論）、I. Roberts（歴史生成文法）、D. Singleton（第二言語習得論）の三氏が独自の目線から語ったことや、特別講演及び全体シンポジウム講師の池上嘉彦氏（認知類型論）、同シンポジウム講師の豊田昌倫氏（言語学的文体論）による年齢を感じさせないエネルギッシュな語りに聴衆が感動した。支部企画シンポジウムにおいても、社会言語学の本名信行氏と井出祥子氏の話に多くの参加者が聞き入った。第三の要因は、当然のこととはいえ、周到な準備にある。本格的な大会実行委員会の会合は 2012 年 1 月から計 8 回に及び、本部の大会運営委員会との連携の下、実行委員は各々の役割を果たすことになった。動員した県立大学の学生 37 名も能く働いた一本部事務局スタッフをはじめ、多くの人々から「この大学の支援学生は本当に優秀だ」との高評を仰いで、これほど嬉しいことはなかった。Last but not least, 魅力的な懇親会を企画したことも要因の一つとして附言しておかねばならない。ヴァイオリンとヴィオラによる出版記念祝賀デュオ演奏という sophistication に加えて、マグロ解体ショーという vulgarism との対照が宴の熱気を一気に押し上げた。

しかし、反省すべき点も少なくない一特に、大学施設の統括的管理が会場校幹事の私一人に集中したことが原因となり、参加者からの不満や希望に迅速に対応することができない事態が生じたのではないかと悔まれる。また、海外提携学会からの招待参加者と JACET 会員との国際学術交流の機会と場は確実に保証されたであろうか。さらには、単純な前例主義に陥って、新しい視点からの企画や運営方法を十分に活かすことが

できなかったのではないか、等々。

最後に、今から8年前(2004年)に財務担当として全国大会開催に関与した私も、実行委員長となると、また別の景色が見えた。再び大会を請け負う機会があれば、今回より数段行き届いた大会が運営できると、実行委員を務めた皆さんは胸を張る。文化は継承され、発展するからこそ意味がある。そうした時間の *drift* の中で、私たち個々人も学会も存在していることを実感させてくれる大会でもあった［余滴］。

英語教育フォーラム報告

支部長　大石晴美
(岐阜聖徳学園大学)

平成24年度は、毎年恒例の支部大会の代わりに、6月2日（土）に「英語教育フォーラム」を名城大学で開催し、特別講演とワークショップを実施いたしました。特別講演講師として、首都大学東京の萩原裕子先生をお招きし、「脳機能からみた外国語としての英語習得」と題するご講演をしていただきました。また、ワークショップでは、「英語で行なうLiberal Arts」と題し、大森裕實先生（愛知県立大学)、YOSHIDA Kayoko先生(Hokusei Gakuen University Junior College)、ROBINSON Eleanor先生(Aichi Prefectural University)、KODAMA Keita先生(Nanzan Kokusai Senior High School)から、Content-basedの授業がいかに有効的であるかについての示唆をいただきました。

萩原先生は、2006年から2008年に科学技術振興機構社会技術研究開発センター研究開発領域におけるプログラムの一環として、「言語の発達・脳の成長・言語教育に関する総合的研究」に取り組まれました。ご講演では、小学生を対象に3年間に亘った大がかりなコホート研究をご紹介され、我が国の英語教育に結びつけた面白い示唆を投げかけてくださいました。

人はどのようにしてことばを習得していくのか、第二言語はどのように習得されるのか、さらには、脳内で何が起こっているのかは、長い間謎でした。ここ10年ほどで、非侵襲的な脳機能測定装置、たとえば、機能的核磁気共鳴画像法(functional Magnetic Resonance Imaging: fMRI)、脳磁図(Magnetoencephalography, MEG)、ポジトロン断層撮影法(Positron Emission Tomography: PET)などが開発され、学習者の脳内を観測することが可能になりました。こうした技術を応用して、これまでブラックボックスと言われてきた言語習得装置のメカニズムを明らかにしようというのが萩原先生のご研究の一環です。

小学校教育現場に目を向けてみますと、ここ最近の大きな変化は、平成23年度から、5、6年生を対象に全面実施された外国語活動の必修化です。現在、現場ではさまざまな試行錯誤が繰り返される中、いつの時点から英語学習を始めるのが適切かという議論が続いています。萩原先生のご研究の中で、学習開始時期と学習時間の関係についての結果が報告されました。脳計測データからは、開始時期よりも学習時間の長さが英語力に影響を与えていることが示唆されています。この示唆は、小学校における外国語活動は、開始時期を大きくとりあげるより、学習を長時間継続して行うことの重要性に目を向けるべきであるという方向づけをしてくださったと感じます。

現在の多くの日本人大学生は、幼少のころ英語学習環境にとっぷりつかることなく成長し、授業に向かっていることでしょう。大学生になって、英語が話せたら、英語が読めたらどんなに世界が広がるだろうかと

南雲堂の英語テキスト
多読とライティングの『総合時事英語テキスト』が登場！　2013年度新刊　木村友保／佐藤雄大／浅井恭子 編著
Better Reading, Better Writing with NHK WORLD NEWS　B5判 120頁 CD付 2,100円(税込) 全28章 各章4ページ Review test有
『NHKワールド・ニュースで学ぶ日本と世界の姿』―多読とライティングでその深層に迫る―　多読とライティングを通して時事、放送英語の捉え方をマスター！
POWER-UPシリーズ
▶ Power-Up English <上級編>／<中級編> 2013年度 改訂新版登場！／<基礎編> ▶ Forerunner to Power-Up English <入門編>も好評！
コミュニケーションに必要な英語の基礎力養成に！ JACETリスニング研究会編　B5判 1,995円(税込)～
片野田浩子先生 大好評テキスト<TOEIC>シリーズ！
A Shorter Course in TOEIC Test Reading 450, 550, 650　K(カタノダ)メソッドによる『5分間』新TOEICテスト・リーディングシリーズ
A Shorter Course in TOEIC Test Listening 450, 550, 650　K(カタノダ)メソッドによる『5分間』新TOEICテスト・リスニングシリーズ
サブテキストに！ 半期用教材として！ 使い方多様！ レベルに合ったスコアー別に！ 大好評『5分間』シリーズ　B5判 各735円(税込)
〒162-0801 東京都新宿区山吹町361 TEL: 03-3268-2311・FAX: 03-3269-2486・E-mail: nanundo@post.email.ne.jp・URL: http://www.nanun-do.co.jp/

感じる人達も多いと思います。そこで、英語学習をいかに進めていくべきであるのかについて、引き続き行われたワークショップで効果的な教授法を投げかけられました。

3名の発表者は、教養英語で実施するContent-basedの授業を紹介され、大学生の知的感性に訴える英語教育の在り方について新たな視点を投げかけてくださいました。まず、“Cultural Diversity in the U.S.: Regions, Ethnicity and Music”では、英語によるオンデマンド教材をインターネット上に展開して行なうモデルケースをご紹介くださり、次に、“Globalising Japanese History: The Significance of Teaching in English in Japanese Universities”では、日本の歴史を英語で学ぶ授業が、外国人学生と日本人学生の双方にとって重要かつ有効であることを主張されました。また、“Using Shakespeare to Raise the Language Awareness of EFL Students”では、コミュニケーション能力養成のためには、文学的ディスコースが学習者の言語意識を高めるうえで重要な役割を果たすと主張されました。現在の学習環境下において、学習者は、さまざまな英語学習手段にめぐりあうことができます。インターネット、文学作品、それぞれの専門領域での英語表現などなど、Content-basedの英語教育として考えた場合、何一つとってみてもとても有用なもので、グローバル人材育成に有効的です。

今回「英語教育フォーラム」を開催し、脳科学および教授法の面から重要な示唆が得られ、我が国の英語教育とその発展性と将来性への期待が膨らみました。例年とは異なったスタイルではありましたが、それだけに支部会員の関心を引き、参加者は60名ほどに達しました。中部支部は、今夏、国際大会で、さまざまな研究者との交流によって刺激を受け、今、さらなる研究の発展に取り組んでおります。今後もより多くの会員の方々と共に支部の発展と運営を考えていきたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

講演会報告1

「国際言語管理の視点から見る言語と文化
－language teacherがculture teacher
でもなければならない訳」
竹下裕子氏（東洋英和学院大学）
2012年10月6日
（於　中京大学）

2012年10月6日（土）中京大学にて開催されたJACET中部支部共催の学術講演会で、東洋英和女子大学の竹下裕子氏を講師としてお招きし、標記演題の講演が行われた。

氏は、先ず、言語監査と同義である国際言語管理の重要性に触れ、世界のグローバル化のなかで、日本の企業や行政にとって効果的な国際コミュニケーション戦略の策定が急務であると明言する。次いで、それに適する人材の育成を目的とする新しい資格「国際コミュニケーションマネージメント」についての紹介があり、その資格取得は英語を専攻する学生に大いに益するとの指摘がなされた。

国際言語管理で重要な国際コミュニケーション能力とは、単に言語面でfluentであるだけでなく文化面でもfluentであることだと氏は指摘し、とりわけ、異文化間リテラシーの重要性を強調する。文化には「見える部分」と「見えにくい部分」があり、相互理解における齟齬が「見えにくい部分」の不理解から生じる危険性が指摘された。言語と文化は密接な関係にあり、言語表出か非言語表出かを問わず的確な異文化

eラーニングで身につける
英語の基礎
テキスト、例題集、Web模試付き
札幌大学 田原博幸先生 著
■ コンセプト
基礎的英文法の短期マスター
■ 特徴
①自動繰返学習機能
②ネイティブ音声付
③学習者に考えさせる解説書
■ 導入実績
大学生のリメディアル教育、
大学入学前の課題
■ 価格2,200円
【お問い合せ】グローバルエフォート（株式会社Newton 正規代理店）
〒460-0003愛知県名古屋市中区錦2-17-11 伏見山京ビル1F、7F　TEL：052-204-0305内線708　E-Mail：info@global-effort.com

理解が必要であることも力説された。

また、異文化間リテラシーに関係する様々な具体例が示された。タイと日本の金装飾品に対するイメージの違い、香港警察でのイギリス人警察署長と中国人巡査とのかみ合わない会話、日本アニメ『千と千尋の神隠し』のセリフの日英語比較など、大変興味深い事例を提示して、氏が主張する「language user が culture manager でもなければならない訳」を検証した。理論と実践をセットにした氏の主張は大変説得的で、参加者一同大いに納得した次第である。

企業や行政のような組織体には適切な国際コミュニケーション戦略が今後益々求められるわけだが、国際言語管理がその優れた対応策となりうることや、国際言語管理に携わる人材を育成する上で大学英語教育が大きく貢献しうる可能性を痛感することができた。今後の大学英語教育に大いに示唆を与える非常に興味深く意義深い講演であった。

吉川　寛（中京大学）

講演会報告２
"Four New Paradigms to Inform Japanese ELT"

James F. D'Angelo (Chukyo University)
2012 年 2 月 18 日
（於　中京大学）

2011 年度中部支部定例研究会において標記の講演が行われた。ダンジェロー氏は中京大学の国際英語学部創設（2002 年）以来同学部の専任教員として英語教育に従事し、国際英語関係の著作も多い。この日の講演では日本の英語教育のとるべき方向性を、現在の理論的枠組みを検討しながら提案した。

最初に「世界諸英語」（WEs）という概念の発展を概説した。国際英語（EIL）という考え方が今や 3 英語圏という考え方（Kachru）によって英語の「所有者」の意識を変革し、第一言語の地位を高めている。それぞれの教養層に用いられる地域英語変種が学習の目標となり、この分野の研究は 4 つの学術誌をもつまでになっている。

しかし、この WEs の研究分野は、特に拡大英語圏において、理解度（intelligibility）に集中するきらいがあり、それも一変種から一変種への研究が多い。国際英語という観点から見るなら、異変種使用者双方向の適応性への理解も求められるところであり、そのための超文化的・共文化的能力も視野に入って来るべきであろう。「異なる世界観」を理解する能力が意思疎通には必要となるはずであるが、この方面には既に言語文化的（Palmer）、認知言語学的（Lakoff）業績に基づく研究（Sharifian など）が始まっている。この分野をダンジェロー氏は新国際英語（new EIL）と称している。

次に、急速に発展を遂げているリンガ・フランカとしての英語（ELF）（Jenkins、Kirkpatrick など）についての解説があった。これは文化的側面よりも言語そのものの特徴を VOICE （Vienna- Oxford International Corpus of English）や ACE （Asian Corpus of English）などのデータベース（corpus）に依存して、どのように意思疎通を図るかを意味論的に文法的に研究するが、この分野の研究者は上記分野の研究者との論争があり今後の進展が期待されるところである。

最後に、L2 Self という概念（Dornyei および Ushioda）の説明があった。英語学習の動機づけにおいて将来の英語使用者としての「理想自己」はもはや異文化にいる母語英語話者に統合する必要がなくなり

大学生のための新しい英語力診断テスト
VELC Test®［ベルクテスト］
Visualizing English Language Competency Test
2012 年度無料実施中
お問い合わせ：VELC 研究会事務局
東京都千代田区神田神保町 3-21（株）金星堂 内
e-mail: info@velctest.org　電話：03-3263-3828　FAX: 03-3263-0716
http://www.velctest.org

非母語話者の動機はさらに強くなる可能性が出てきた。WEsという枠組みによってこの分野の英語教育理論も今後大きな影響を受けることになる。

これらの4つの枠組みにより英語教育現場で今後、期待できるものは少なくない。筆者の注意を引いたものだけでも、自分の文化を説明し双方の立場を理解する能力の獲得、誤りの修正よりも創造性の発見、第一言語の影響のプラス評価、音節リズム英語の容認、などが挙げられる。

今後、日本の英語学習者は日本人の英語に自信を持つことができるのではないか、他の非英語母語話者のように日本人も上手く英語を使用できるようになるはず、など楽観的な一面もあるが、英語教育への最近の諸説をどのように利用すべきかについて具体的な概念を提供した有益な、元気づけられる講演であった。

下内　充（東海学院大学）

海外学会報告

Sociolinguistics Symposium 19（SS19）報告

2012年8月21日から24日までSociolinguistics Symposium 19（通称SS19）がベルリン自由大学(Freie Universitat Berlin）で開催された。テーマは‘Language and the City’というものであった。Sociolinguistics Symposiumはヨーロッパを中心とした社会言語学の学術会議で、ヨーロッパの大学が持ち回りで会場校となり隔年に開催される。SS18は2010年にイギリスのSouthampton大学で開催された。またSS20は2014年にフィンランドのJyväskylä（ユバスキュラ）大学で開催予定となっている。ヨーロッパを中心とした学会であるので、参加者はヨーロッパで活躍している研究者たちが圧倒的に多いが、アメリカやオセアニアやアフリカ、アジア圏からも集まってくる。SS19のアブストラクトによると、60か国から1,000名を超える研究者たちが参加したそうである。

発表は社会言語学で扱われるテーマを網羅しているが、言語接触や言語変異に関する研究でも移民やその子どもたちが抱える問題に直面するヨーロッパの事情を反映して、家庭内とスピーチ・コミュニティー、または学校と家庭での言語といったものや、アイデンティティーの構築・維持、多言語使用(multilingualism)、都市化がもたらす言語変化、などヨーロッパの言語事情が現在進行形で伝わってくる発表が多かった。大きな刺激を受け、日本の未来の言語事情についてもいろいろ考えさせられる機会となった。

今回は待遇表現研究会からは3名が発表を行ったが、thematic sessionとはせず、個人の発表という形をとった。そのためいつものような日本語がわかる外国人研究者や日本人が多いオーディエンスではなく、多彩な人たちを迎えることになり、活発な質疑応答が展開された。予期しない質問が出ることで自分の思い込みに気がついたり、新たな視点を得るという収穫があった。

国際学会では、本や論文で目にするビッグネームの研究者の話を生で聞けることも楽しみの一つである。個人的な話で申し訳ないが、私はPeter Auerの‘Standardization and diversification: The urban sociolinguistics of German’とPenelope Eckertの‘He thinks he's gang: Indexicality at the border’の基調講演を楽しみしていた。ところがEckertの講演が直前にキャンセルになったことを会場で知った。大変残念であったが、次回のSSまでEckertさんがお元気でいることを信じて待つこととしよう。

村田泰美（名城大学）

成 美 堂 2013年　新刊テキストのご案内

学習者のやる気を引き出す、やさしい総合教材！
角山照彦, Simon Capper
Let's Read Aloud & Learn English!

豊富なタスクを取り入れたニュース映像教材！
熊井信弘, Stephen Timson
CBS NewsBreak

身近な話題から世界へと広がる科学の映像教材！
椋平 淳, Bill Benfield, 辻本智子, 村尾純子
AFP Science Report

やさしいTOEICのリスニング副教材！
石井隆之, 山口 修, 小林英雄, 梶山宗克, Joe Ciunci
Listening Promoter for the TOEIC® Test

好評TOEICシリーズの決定版！
石井隆之, 山口 修, 上田妙美, 梶山宗克, Joe Ciunci
Perfect Practice for the TOEIC® Test

TEL:03-3291-2261
FAX:03-3293-5490
https://www.seibido.co.jp
SEIBIDO

会員著書紹介１

田中春美・田中幸子［編著］

『World Englishes－世界の英語への招待』

昭和堂 2012年
ISBN978-8122-1227-1
2,400円　206頁

中部支部会員にとって注目すべきは、本書の編著者である田中春美氏、田中幸子氏に加えて、共著者の川村陽子氏、今村洋美氏、菱田治子氏、後藤いく子氏、大石晴美氏の全著者がJACET中部支部会員であることだ。日本におけるWorld Englishes論の発祥の地が名古屋であることを考えると、まさに面目躍如といえる。

本書は3部からなり、各部はKachruによる三つのCircleにそれぞれ対応しているが、分量配分からInner CircleとOuter Circleに重点が置かれていることがうかがえる。各Circleの多様な英語変種については過不足なく取り上げられていてCircleの全体像の把握を容易にしている。また、各英語変種についても言語的特徴だけでなく背景にある文化、社会にも言及してより深い理解を得る助けとなっている。

「おわりに」で述べられているように、本書は大学生を対象としたテキストを意識して書かれている。紹介者が知る限りでは日本で最初のWorld Englishesに関するテキストである。各章に練習問題や厳選の参考文献が収録されていて学生の学習に適した配慮がなされている。更に、興味深いコラムが40か所以上に配置されていて学生が関心をなくさずに学習を継続できるように考えられている。World Englishesの理念に賛同する紹介者としては、この書がテキストとして広く使われてWorld Englishesの理念の理解者が益々増えることを願うものである。

吉川　寛（中京大学）

会員著書紹介２

榎木薗鉄也［著］

『インド英語のリスニング』(CD Book)

研究社　2012年
ISBN978-4-327-43078-8
2,400円　204頁

現代インドの文化とインド英語の特徴を具体的に理解させてくれる貴重な本が出版された。著者の榎木薗氏は（中部支部会計としても奮闘しておられるが）、南アジアの言語政策・教育政策、インド語学（インド英語・ウルドゥー語／ヒンディー語）の研究者であり、本書は氏の専門的視点と長年のインド生活体験者としての視点が融合されて、多面的で実際的な魅力をもった本となっている。

第一に、インド英語の「リスニング」教材としての価値がある。インド支社に赴任した日本人ビジネスマンがインド社会で遭遇する様々な出来事が一連のストーリー性をもって描写されており、聴いていても楽しい。インド英語の文法特徴も詳細に記述されており、英語と現地語との融合の様子や、日本人英語との共通性なども記述されていて、興味深いものとなっている。ＣＤに収録されているインド英語は聞き取りやすく、英語学習者のモデルとしても全く違和感がない。また、量的にも十分な会話文が収録されている。

第二に、インドの生活と文化を伝える読み物としての魅力がある。「インドへの出発・到着」「ビジネス編」「生活編」「観光編」のテーマ毎に、多数のコラムが掲載されており、最新の生活情報を知ることができる。街中でのインド人との交渉術など、旅行用のガイドブックとしても役立つものであり、「本当にインドを知っている人」が書いている本であることがわかる。

第三に、part 1の「インド英語概説」において、インドの歴史・言語状況・言語政策・インド英語の特徴が簡潔にまとめられている点が魅力である。この部分は著者の専門研究領域であり、内容は充実している。また、part 3の「インド英語表現集」も利用しやすく、眺めているだけでもインドの暮らしが見えてくる資料となっている。

本書は英語教材でもあり、教養書でもあり、専門書でもある。国際英語論の研究者や英語を学ぶ大学生、インドに赴任するビジネスマンやインドへの旅行者など、幅広い読者にアピールしうる書物であり、使い易

さと情報の豊かさという点で、他に類のない良書であると思われる。

小宮富子（岡崎女子短期大学）

研究会紹介

ライティング研究会

私たち、ライティング研究会は、代表木村友保（名古屋外国語大学）、副代表佐藤雄大（名古屋大学）を含め、計５名で、名古屋外国語大学を会場に2ヶ月に一回のペースで研究会活動を行っています。「書くということはどういうことか」ということに常に焦点を当てながら、英語ライティング活動、指導のありかたの研究を継続してきました。昨年度までは、Bereiter & Scardamalia (1993) *Surpassing Ourselves* をテキストとして、expert と novice について考えを深め、「よい書き手になるとは」について議論を行ってきました。この研究活動を昨年度の JACET50 周年記念国際大会（福岡）で、ポスター発表したことで、一区切りをつけ、今年度から、新しく教育実践に焦点を当て、ライティングセンターを対象として研究を始めました。「ライティングセンター」とは、北米の多くの大学に設置されているライティングの支援部門で、学生が授業に関連して書いた課題をライティングセンターのチューターに相談しながら、書き直しを繰り返し、より良い作品に仕上げることを支援する機関です。日本でも、近年このライティングセンターが大学に設置されはじめ、東京大学、早稲田大学、上智大学、大阪女学院大学、国際教養大学に、中部圏では名古屋大学に設置されています。

ライティングセンターは、北米発祥のため、英語教育との関連で語られることも多く、特に日本では、英語ライティングを対象としたセンターが多いため、私たち研究会は、そのセンターのライティング指導実践に関心を持ち、日本におけるライティングセンターの現状がどうなっているのか、そしてその支援や教育はどうあるべきかということを研究していくこととしました。また、いずれはこの研究に基づき、どのような習熟度の大学生にとっても有益なライティングセンターを構想したいと考え、「日本人のための英語ライティングセンター構築の可能性とその実現計画」を科研費研究に応募したところ、採択され（課題番号24520717)、研究会としての目標がより明確となりました。

この研究プロジェクトの一環として、本年度、私たちは以下の国内外のライティングセンターを訪問し、センター長にインタビューし、各ライティングセンターの現状調査を行いました（訪問順)。

【国内】大阪女学院大学、東京大学、上智大学、政策研究大学院大学、津田塾大学、早稲田大学、国際教養大学

【国外】Marian University, University of Indianapolis (Indianapolis, IN, U.S.), Pace University (New York, NY, U.S.)

訪問を終え、現在その訪問結果をまとめている途中ですが、国内、国外いずれのライティングセンターも、学生が書いたものの添削ではなく、学生が何回か書き直しをする過程を通じて、彼らが「書き手」として成長することを支援したいと考えていることが分かってきました。私たちは、このようなライティングセンターの現状調査と並行して、理論的研究も行い、大学生にとって必要なライティングセンターを構想していきたいと考えています。

佐藤雄大（名古屋大学）

Cyber Space

The Speech Accent Archive

Leah Gilner (Bukyo Gakuin University)

The Speech Accent Archive (http://accent.gmu.edu/howto.php), compiled by Steven H. Weinberger at George Mason University, contains a collection of speech samples from speakers of English around the globe. All of the speakers have been recorded reading the same elicitation paragraph. A phonetic transcription is provided for each sample. The website also gives biographical data for each speaker including: birth place, age, native language, other languages, years and type of English language study as well as time spent living in English-speaking countries. In this way, the Archive serves as a database that can be used for systematic study and comparison of international accents.

The Archive is a valuable tool for linguists and language learners alike. Here, I would like to

emphasize its usefulness as a language learning resource. The global use of English implies that we as teachers cannot anticipate with whom our students might need to communicate. Therefore, it is in principle necessary for our students to develop a flexible ear in order to help them understand a wide range of accents. Teaching listening fluency in this context is greatly facilitated by the material available on the Speech Accent Archive website, either for use in class or as a self-study aide.

The website is easy to navigate. The user can search for recordings of speakers from a specific region by choosing from an alphabetized list of native languages or by clicking on a map of the world. The clickable map is particularly useful since the user can easily see where each speaker is from and how many samples there are for a certain area. This makes it possible to choose which accents to focus on at a given time and to plan a course of progress.

掲示板

『JACET 中部支部紀要』編集委員会では、第 11 号への掲載論文の投稿を受け付けます。以下の要領でふるってご投稿ください。詳細は支部 HP をご覧ください。

締　切：2013 年 8 月 20 日
掲載料：刷り上がり１ページにつき 1000 円の割合で掲載料を払う
長　さ：論文 15 ページ、実践報告・研究ノート 10 ページ、書評 5 ページ程度
投稿規程：『JACET 中部支部紀要』第 10 号巻末及び、JACET 中部支部ホームページに掲載
問合せ：JACET 中部支部事務局
中部支部紀要編集委員会

事務局より

◆新入会員のご紹介
2012 年 5 月から 2012 年 11 月までの中部支部所属新入会員は以下の方々です。よろしくお願いします。（敬称略、入会順）

森　なほみ（東海学園大学［非常勤］）、森山真吾（中京大学）、今村洋美（中部大学）達本美香（名古屋学院大学）、グレイ　ジェームス（福井大学［非常勤］）、加藤あや美（名古屋短期大学）、ジョージ　ジョニー（名古屋商科大学）、中島眞吾（名古屋短期大学［非常勤］）、Dimoski, Blagoja（東海大学）、菅野雅代（福井大学［非常勤］）、加藤主税（椙山女学園大学）、岩田恭子（中京大学［大学院生］）、Laurence, David（中部大学）、木下　徹（名古屋大学大学院国際開発研究科）、榎本剛士（金沢大学）

◆12 月定例研究会の開催報告
2012 年度 12 月定例研究会が 12 月 22 日（土）14 時より中京大学にて開催されました。3 件の個人研究発表と授業学研究会による研究発表、苅谷夏子氏による講演が行われました。

◆第 2 回支部総会開催報告
2012 年度第 2 回支部総会が 12 月 22 日（土）13 時より中京大学にて開催されました。2012 年度理事会報告、2012 年度事業計画の進捗報告、2012 年度予算の執行状況報告が行われました。また、支部役員会から提案された、2013 年度事業計画案、2013 年度予算案、2013 年度人事案が承認されました。

◆2 月定例研究会開催のご案内
2012 年度 2 月定例研究会を 2013 年 2 月 23 日（土）に中京大学にて開催します。研究発表申し込みの締め切りは 1 月 18 日です。発表希望者は、氏名・所属・タイトル・概要（日本語 300 字または英語 200 語程度）を記載の上、件名を「JACET 定例研究会発表申し込み」としてメールで事務局までお申込みください。

◆2013 春季英語教育セミナー開催のご案内
春季英語教育セミナーが 2013 年 3 月 16 日（土）9 時より青山学院大学にて開催されます。テーマは「意欲ある自律的学習者を育てる」です。詳細は JACET ホームページをご覧ください。

◆2013 年度 JACET 全国大会のご案内
JACET CONVENTION 2013－The 52nd International Convention－が 2013 年 8 月 30 日（金）から 9 月 1 日（日）まで京都大学にて開催されます。テーマは「英語教育の連携と相対化」です。

◆住所変更届提出のお願い
支部会員のみなさまに、支部紀要やニューズレターなどの郵便物をお届けできない事例が増えています。お手数ですが、転居の際には、JACET 本部事務局に住所変更届をご提出ください。

ニューズレターは会員の皆様のフォーラムです。ご意見、ご要望等は事務局までメールでお送りください。投稿も歓迎いたします。

中部支部事務局
〒466-8555 名古屋市昭和区御器所町
名古屋工業大学石川有香研究室内
ishikawa.yuka@nitech.ac.jp

中部支部の活動詳細は、以下のサイトをご覧ください。
JACET 中部支部ホームページ
http://www.jacet-chubu.org/

JACET-Chubu Newsletter 第 29 号
2012 年 12 月 20 日発行
発行者：　大学英語教育学会中部支部
大石晴美
編集者：　石川有香
佐藤雄大　室　淳子